

社会インフラ解説グループ

目的

- ・ 社会資本の果たしてきた役割と意味を正しくわかりやすく伝える

段階的目標

- ・ 国土、インフラ基本情報の収集整理
- ・ 土木リテラシー向上に貢献する支援
- ・ インタープリターの養成

具体的活動

- ・ 市民や教育機関等との連携や支援
- ・ 多岐分野にわたる解説委員の整備
- ・ ネット配信→出版、市民講座等

私たちの暮らしと密接な土木の関係

「土木は生活と密接な関係にあり、毎日毎日の生活を支える範囲の広い領域であり、その成果は全ての人を利用する」
高橋裕ほか『土木工学概論』より

社会資本の果たしてきた役割と意味を
正しくわかりやすく伝える



わが国独自の自然・風土を相手として経験・技術を重ね、そうした人と自然との関係性の中で、私たちの暮らしと密接に関わって貢献してきた社会インフラの役割と価値を、市民社会と共有して、健全で安心できる社会を共築していく

土木と住民・意識の乖離が これからの社会へ及ぼす影響への懸念

私達の暮らしや自然と密接に関わってきた
土木の価値、仕事、土木技術者の役割



住民とくに若年層 = 縁遠い存在
土木=社会や住民の理解が得られないジレンマ
容易に克服できないテーマとして継続中



土木と生活者の間に意識・認識の乖離が拡大



社会全体の適正な総意向上や発展を妨げる懸念

若年層からの「土木リテラシー」向上への支援

「日本国民の災害に関する科学知識の水準をずっと高めることが出来れば、その時にはじめて天災の予防が可能になるであろう。この水準を高めるには何よりも先ず、普通教育でもっと立ち入った地震津波の知識を授ける必要がある。

(寺田寅彦『津波と人間』昭和8年)

土木リテラシーとは

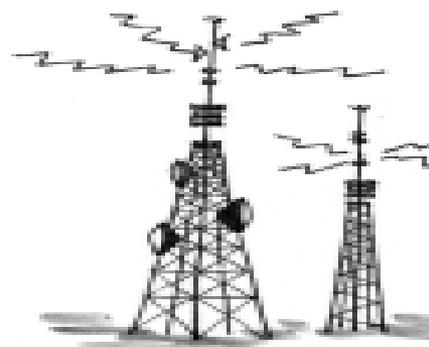
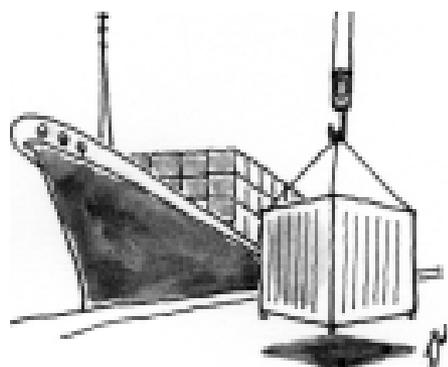
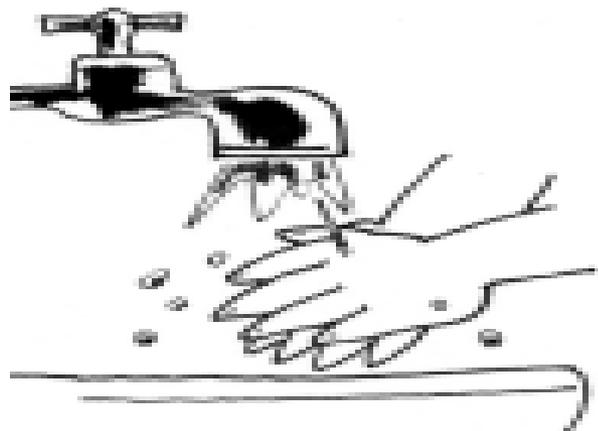
- 1)「一市民が日常生活を営む上で最小限必要な土木分野に関わる知識、能力、態度」
- 2)「現代社会で自らの判断力を持って生活していくために、全ての子供が獲得しなければならない基本的能力のひとつ」

目的は！



「これからの社会形成に対して適切な意志決定を行うための基礎的素養」

たとえば、24時間 ふつうの暮らしを支える 社会インフラと土木の仕事

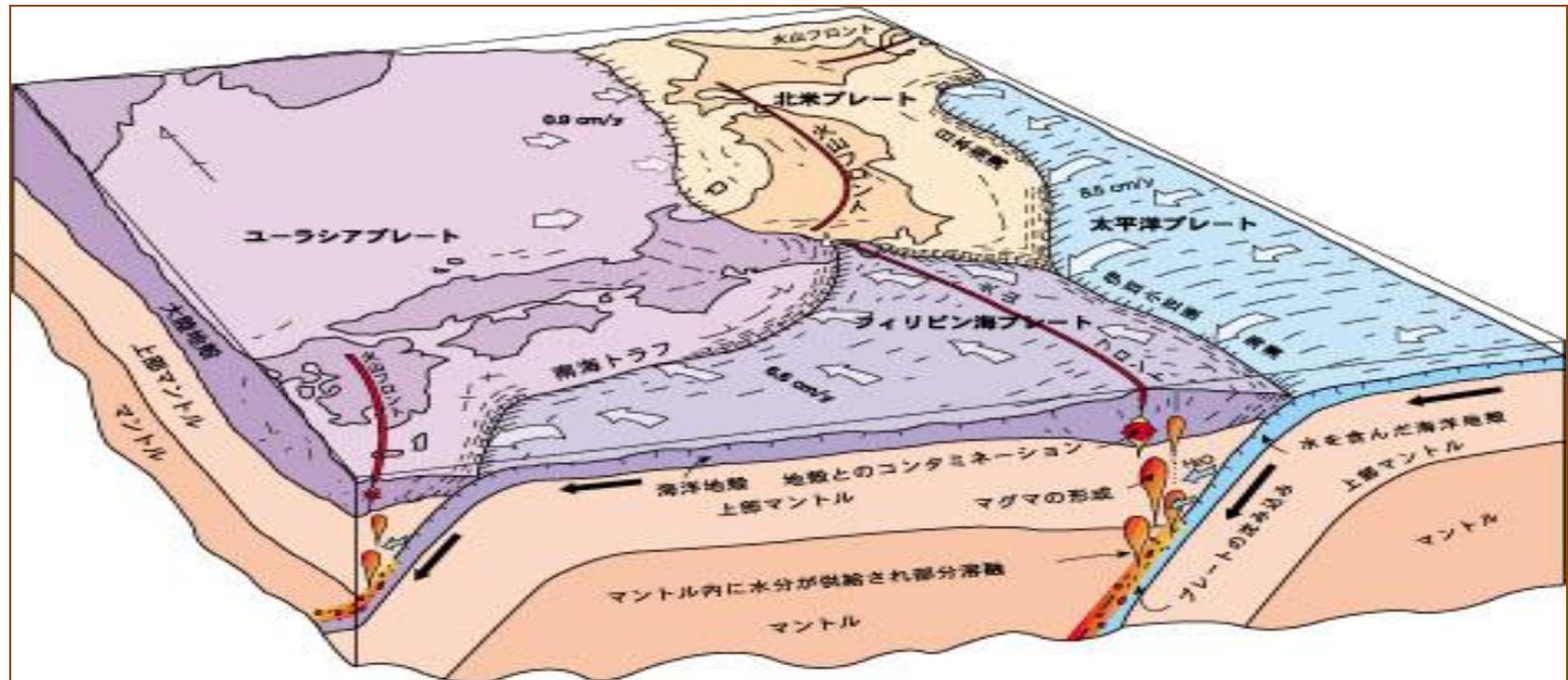


日本独特の風土と社会インフラの関係

日本の自然や地理・気象・地形といった環境の特性が 土木事業には色濃く反映されている

地形＝地殻変動によってその概形がつけられた変動地形。

日本の国土面積38万平方kmの特徴は、山地が約70%で土地が脆弱。
その上、断層や地滑り、火山地帯など不安定で複雑な地形、地域によって異なる土壌、軟弱な地盤 **それらに対応してきた土木の役割**



でも、

言葉や理念では伝わりにくい土木の役割と価値

どうやって伝え、社会と共有していくか！！

これが、土木界が長年抱えてきた

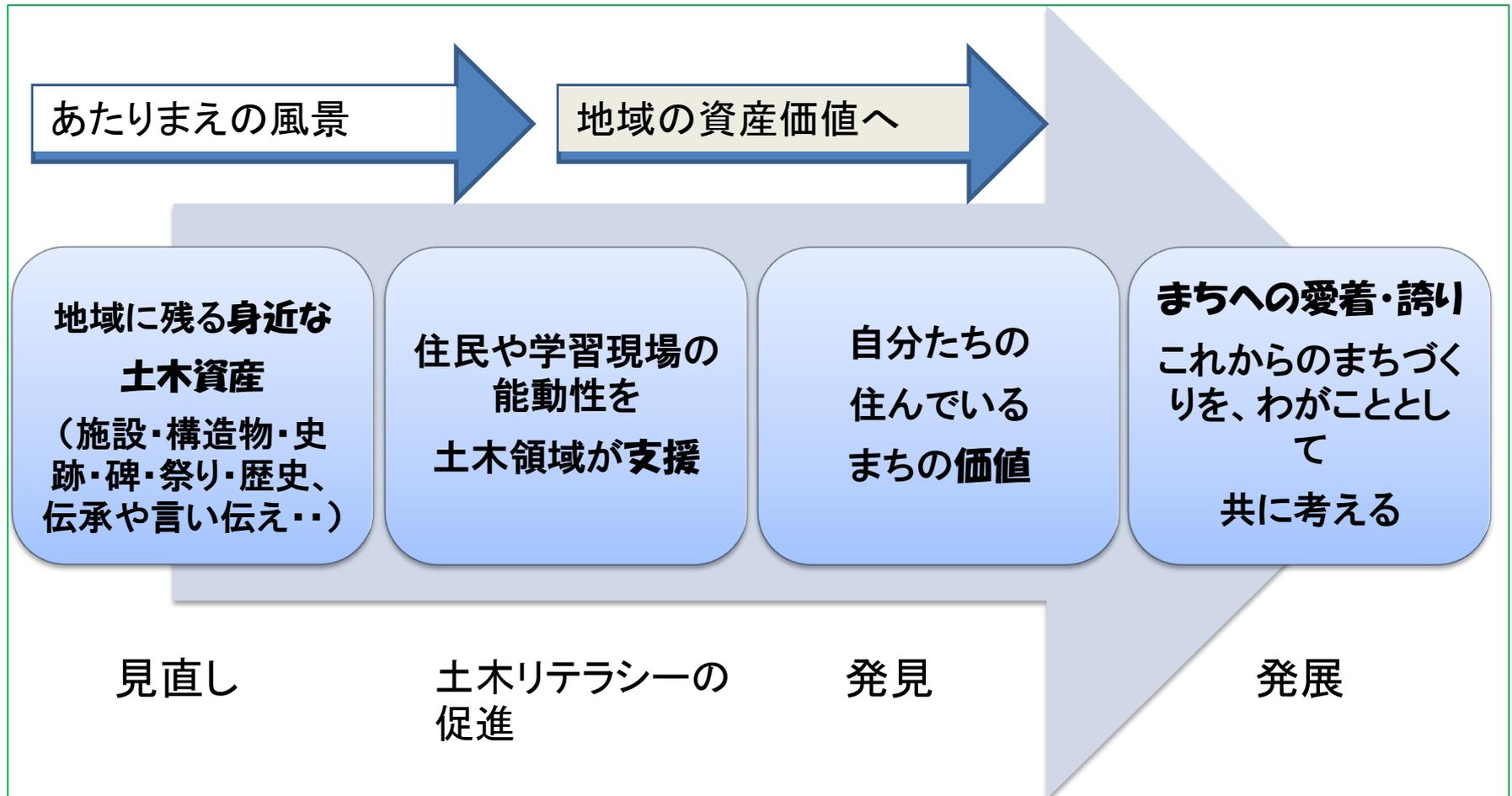
大きなジレンマの一つです

小学校社会科における学習指導要領の目標・内容

(注)2008年に改訂・告示された小学校学習指導要領・社会より

段階	学年	目標と内容
第1段階	第3・4学年	私たちの住んでいる地域や暮らしについて、身近な道具や文化財、年中行事、先人の事例などから歴史的に見直す
第2段階	第5学年	私たちの住む地域や暮らしは、国土や気候といった日本独自の環境とどのように関係してきたのかを学ぶ
第3段階	第6学年	国土づくりや地域づくりの発展に尽くした先人や、その業績として残る歴史資産について調べ、自分たちの生活の歴史的背景を理解する

自分たちの足元から 身近な宝物探し



活動例

土木に馴染みの薄かった一般の人たちと、 土木構造物や施設に親しむ・学ぶ・楽しむ市民講座



土木遺産を訪ねて

～大東京建設の舞台裏～清洲橋、永代橋を歩く～

全国に五二の教室を設け、年間のべ約七五万人の一般市民が受講するNHK文化講座の顧客層を取り込むコラボモデル



まち歩きで土木の歴史と役割を知る



柔らかな広報媒体による土木リテラシー支援 「土木の絵本」による取り組み

活動例



古代から近代、人と自然が共存することの意味、そこで果たした土木技術の役割を、土木工学や歴史の研究に基づいて描いた

市民と旅して学ぶ

海外選奨土木遺産台湾ツアー 「烏山頭水庫と台南水道」

活動例



旅行会社や
台湾NPOと連携

活動例

映像媒体による土木リテラシー促進 「夢は世界をかけめぐる」海外技術協力のパイオニア



土木学会2014年度第26回映画コンクール
最優秀賞受賞作品

当作品は、国際コンサルティングに道を開いた久保田豊の半生を、アニメーション、記録写真、実写映像を使用して描いた作品である。雄大な阿蘇の麓で育った久保田豊は、自然を相手に仕事をしたいと考え、土木技術の道に進みダムを作り発電所の建設こそが世の中を豊かにすると考えるようになり、やがて中朝国境に当時世界最大級のダムを建設する仕事を成功させる。戦後、久保田豊は経験と技術を活かし事業の相談、設計、計画、調査などを行うコンサルタントを第二の人生に選び、世界各地で建設の指導に当たった